

メソジスト教会の聖餐理解 — Ritualの変遷をめぐって —

林 牧 人

序

メソジスト・ヘリテージのアイデンティティの要として主張される Altar Rail = 「恵みの座」については、不要論、また、保持の主張、いずれにおいても、「メソジスト教会では『恵みの座』としてこれを残すことが伝統であると言われる」という「常識」が前提とされてきた。この「常識」については、語られること少なく、十分に論じられてこなかった現実があることは、すでに指摘したとおりである。¹しかし、それ以上に、その用い方と、それを支える「Ritual（礼文）」については関心が希薄であったことを指摘しうるであろう。陪餐用跪座台という物理的構築物は、リタージェにおいて用いられてこそ、存在の意義を獲得する。従って「メソジズム」における「恵みの座」=Altar Railの存在について論じるならば、必然的に「Ritual」についても論じられるべきである。しかしながら、メソジスト・ヘリテージにおいて、この分野での先行研究は決して多くはない。

米国メソジスト教会における「Ritual」の変遷について、通史的に取り上げら

¹ 拙論「メソジズムにおける Altar Rail (Communion Rail) をめぐって—「恵みの座」保持の意義とメソジスト・ヘリテージ—」『ウェスレー・メソジスト研究』7 (教文館、2006) 参照

れている書物として、19世紀後半の R. J. Cooke のものがある。² 書物の前半は、ヘンリー 8 世による英国教会の分離から説き起こして、ウェスレーの時代に至るまでの祈祷書の変遷を丁寧記述し、ウェスレーの祈祷書に至る歴史的文脈を明らかにし、後半では、出版当時のメソジスト監督教会の「Ritual」について、その出典を明示しつつ解説を記述している。Cooke は、メソジスト監督教会の説教者達が、自らの言葉で祈り、黙想することがより良く可能になるとの判断を持ったことから、ウェスレーの祈祷書が次第に顧みられなくなり、「Ritual」として大幅に縮小されたものに変化し、さらに、リヴァイヴァルとキャンプミーティング中心のフロンティア時代に突入していったことを、批判的に記している。³ 彼の手になる他の著書として、*Reasons for Church Creed; The Historic Episcopate; Christianity and Childhood; or, The Relation of Children to the Church.* 等があることから、メソジスト教会を真実に「歴史的、使徒的教会」とするために必要な事柄を再発見するという意味でのリタージカル・ムーヴメントの先鞭をつけたものとして興味深い。「Ritual」について論じることは、いきおい、リタージーの表面的な形式の叙述にとどまらずに、教会を教会たらしめる根源に触れることになるのである。

20世紀前半は、米国諸教会にてリタージカル・ムーヴメントが大きくなるとして巻き起こりつつあったが、メソジスト教会においては、Cooke の切り開いた道をさらに前進させ、大きくなると引き起こすきっかけとなった書物が出版された。後に、監督に叙されることになる H. B. Harmon の若き日の労作である。⁴ 時代を先取りしすぎて、出版社はこの本を 1500 部印刷した後、その版を破棄してしまった。なぜなら、こうした内容の本がさらに多く売れるとは予想できなかったからであるが、実際には、Harmon の主張に関心を寄せる人々が存在し、「新ウェスレー主義 (neo-wesleyan)」と呼ばれる立場を形成した。ウェスレーが、米国メソジストに向けて用意した「Sunday Service」に於いて示

²R. J. Cooke, *History of the Ritual of the Methodist Episcopal Church* (Cincinnati: Jennings & Pye, 1900)

³ *Ibid.*, p.170.

⁴ Nolan B. Harmon, *The Rites and Ritual of Episcopal Methodism* (Nashville: Publishing House of the M. E. Church, South, 1926)

されてはいたが、100年近くにわたって顧みられなかった、一定の礼拝形式を支持する立場をとったのである。⁵

本論では、この Harmon の先行研究に学びつつ、これを増補する方法をとりつつ、聖餐理解にまつわる、メソジスト・ヘリテージを受け継ぐ諸教会に固有な課題を取り扱う。ことに、「先行の恵み」の浅薄な理解から生じる、いわゆる「無差別配餐」の主張について、「包括的 (inclusive)」であること陪餐資格との緊張関係が取りざたされている現状に対する指針となるべき見解を求めたい。このことは、北米メソジスト諸教会を母教会として持つメソジスト・ヘリテージを受け継ぐ諸教会のうち、決して少なくない群が日本基督教団という合同教会形成に参加している日本の現状においては無視できない課題である。

本来、信仰告白と陪餐資格とは直結しないのがメソジスト教会のあり方である。洗礼を受けているか否かが問題とされるべきである。19世紀の半ばに、正会員と準会員という区別が米国メソジストの諸教会に現れた。洗礼を受けることはキリスト者になることであり、それとは別に、メソジストとなるために猶予期間が設けられ、準会員として信仰上の訓練を受けた後、あらためて入会式を通して正会員になるというものである。これは、ウェスレーが、メソジスト会を教会としてではなく、すでに何らかの形で洗礼を受け、諸教会に属するキリスト者のうちで志を与えられたものが自覚的に組織されるソサエティとして組織したことに範を見ることもできよう。程なくして、準会員と呼ばれるのは、幼児洗礼を受けた者に対してだけになっていく。すると、幼児受洗者の信仰を確認して教会に受け入れるプロセスが問題となるが、このことが、伝統的諸教会にならって「堅信礼」として正式に確立されるのは、1965年を待たねばならなかった。⁶「Ritual」の変遷を見ても、成人洗礼においては、猶予期間がなくなり、洗礼執行の後引き続いて入会式が執行されるようになっただけであり、その構造そのものは変わっていない。いずれにせよ、準会員であっても、適当な時期を見定めて洗礼の意義と目的を説き、聖餐に与らせることを通して、正

⁵ J. F. ホワイト、越川弘英監訳『プロテスタント教会の礼拝』、日本基督教団出版局、2005年、309-310頁。

⁶ 前掲書、301-302頁。

会員となるべき訓練を受けることが求められていたのである。⁷ このことが、神学的混乱を招致してきたことは想像に難くない。いわゆる小児陪餐が常態化したことで、準会員と正会員の壁が無意味化するという結果を招致し、陪餐資格と自覚的信仰との関係が整理されないうまま経過したのである。米国のメソジストは、リタージカル・ムーヴメントのうねりのなかで、洗礼と堅信という伝統的理解に当てはめることで解決を図ったのであるが、日本メソヂスト教会は、北米メソジスト諸教会での変化のうねりを十分に吸収することなく日本基督教団創立に参加し、神学的混乱を抱えたまま戦後を迎え、この問題の解決を図らぬうちに、信仰告白と陪餐資格とが結びつく他の諸伝統の形に接ぎ木されることになったのである。昨今、日本基督教団における「無差別配餐」の根拠として、メソジスト・ヘリテージの「包括的」な特性があげられることがままあるが、上記のような、会員資格をめぐる神学的混乱が背景にあることが捨象されたままの主張であると言わざるを得ない。このことは、洗礼と聖餐に関わる「Ritual」の変遷を見ることで、よりいっそう明らかとなる。そもそも「メソジストの説教者達の多くは、聖餐、洗礼、結婚、葬儀などに用いられる種々の祈り、聖書朗読、式文が指し示すところの意味をほとんど知らないのである」。⁸

以上のような認識を持って、米国メソジスト教会における「Ritual」の変遷を通してその聖餐理解について考察し、課題そのものを共有し、今後の研究の端緒とすること、これが、本論の目的である。

1. 米国メソジスト教会における「Ritual」変遷の背景

ジョン・ウェスレーは、「祈祷書」に対する愛着と、その実践の継承を望んでいたことは明らかであり、それが「Sunday Service」の編纂につながったのである。しかしながら、実質的米国メソジストの創立者と言ってもよいところの監督アズベリーはこれを継承せず、むしろ棄却したのである。ウェスレーの「祈祷書」に対する愛着、頻繁な聖餐の執行、教会暦に対する熱意といったものは、メソジスト教会に於いて急速

⁷ 日本メソヂスト教会『教義及び條例』（日本メソヂスト教会、1907）他参照

⁸ Harmon, *op. cit.*, p.9.

に失われていった。アズベリーは、ウェスレーの伝統主義からはほとんど影響を受けることがなかったが、その実用主義からは大きな影響を受けた。従って、米国メソジストにおける改革の大部分は、実用主義的なものであり、ウェスレーの伝統主義の実りであるところの「Sunday Service」が顧みられなくなるのは当然の帰結であった。⁹ メソジスト監督教会設立前後に、聖餐執行がなされない現実に業を煮やしたメソジスト説教者の一部が、按手を受けないまま聖餐執行する事態に、アズベリーは反対し、それをやめさせる形で調整することに成功したが、その意図は、聖礼典に対する伝統主義の擁護と言うよりは、教会における訓練（ディシプリン）の問題であった。¹⁰ また、メソジストの教職者達は「目を開けているときよりも目を閉じているときの方が、より深く敬虔な思いに集中し、またよりよい祈りをささげることができる」との確信を持っていたという。¹¹

1792年、ウェスレーの死後1年を経て、大きな変化がもたらされた。「ディシプリン」の中に、「Sacramental Services, Etc.」とのタイトルで、聖餐の後半部分、幼児洗礼、洗礼、結婚、葬儀に加え、3職位（監督・長老・執事）のための按手礼だけが、わずか37頁に収められたのである。この動きは、米国メソジストの大多数の共感を得ていたのである。そこで、314頁からなるウェスレーの「Sunday Service」は、密やかに葬られることになり、やがて、この「Sacramental Services, Etc.」が増補改訂されて「Ritual（礼文）」へと移行することとなる。¹² 皮肉にも、米国における福音主義自由教会に於いて、礼拝式が「ディシプリン（教会条例）」に定められているのは、他に例を見ず、メソジストの特質であるなどと称揚される面もあるが、実際には、ウェスレーのもつリタジーに対する深い敬虔と実践からはかけ離れたものとなっていくのである。

しかしながら、メソジズムには、絶えず相反する要素が共存し続けては、ねじれた状態にあるという特質がある。例えば、「Sunday Service」は黙殺しても、「Sacramental

⁹ ホワイト、前掲書、293頁。

¹⁰ 前掲書、294頁。

¹¹ Harmon, *op. cit.*, p.47.

¹² *Ibid.*, p.49.

ホワイト、前掲書、294頁。

Services, Etc.」という形で「Occasional Services」は保持するという具合である。¹³ 英国からの独立を勝ち取った米国の人々は、信仰生活の場についても英国からの影響を排除したいと考えたのである。英国教会の「祈祷書」のみならず、ウェスレーの「Sunday Service」までが排除されるのはそのためであるともいえよう。しかしながら、この点においても、メソジストは二律背反の要素を抱え込んでいる。メソジスト監督教会の組織より5年後、独立戦争後の逆境にもかかわらず、勇気ある人々は米国聖公会（Protestant Episcopal Church in America）を組織したが、米国独立後の数年間、メソジスト監督教会は、米国に於ける英国教会の継承者であると自認していたというのである。¹⁴ 英国教会の牧会様式を用い、Episcopal な名称を用いて、教会統治をすと言った具合である。例えば、あの監督アズベリーとその周辺の説教者たちですら、ガウンと聖職者のカラー（bands）を身につけ始めたと言うことがある。ところが、この習慣はメソジストの説教者の間では長くは続かなかつた。¹⁵ これは、「Ritual」の変遷と無関係ではないであろう。

19世紀を迎え、メソジズムはフロンティア世界に於いて、急激な拡大を遂げることとなる。しかし、その代償は大きかった。開拓地の礼拝に求められたのは、信仰を復興させるための訓練ではなく、教会に属したことがない人々に、教会の信仰そのものに触れてもらうことであつた。読み書きも満足にできない人々に、讃美歌は効果的に作用した。そして、祈祷書に則った定められた形の礼拝ではなく、自由な形式そのものであつた。開拓地そのものが、自由を基調としており、礼拝においてもそれは犠牲とはされなかつたのである。¹⁶ いわば、礼拝が、回心者獲得のためのシステムに変容したのである。Altar Rail は、聖餐に与る場所と言うよりは、悔い改めの祈りを捧げるために進み出る場所へと変質し、ウェスレーが「Sunday Service」で目指したところの、聖礼典を中心としたリタージェーによって「身体性」をもって神臨在に与るという信仰の形は崩れ、説教中に「アーメン」と叫ぶ、一人称の讃美歌で個人的な回心体験を歌

¹³ Harmon, *op. cit.*, p.49.

¹⁴ *Ibid.*, p.50.

¹⁵ *Ibid.*, p.51.

¹⁶ 拙論「メソジズムにおける Altar Rail (Communion Rail) をめぐってー「恵みの座」保持の意義とメソジスト・ヘリテージー」『ウェスレー・メソジスト研究』7 (教文館、2006) 参照

うといった、別の意味での能動的「身体性」への換骨奪胎が引き起こされていった。これは、伝道地では成功を治めたし、このような形で救われた者がメソジストの伝道者となって更に同種の信仰者を生み出すといった具合で拡大していったのである。また、伝道対象者の識字率の低下は、「祈祷書」由来のあらゆる事柄に対して決定的衰退をもたらした。また、枠組みが崩れたことで、英国教会やウェスレーに由来しない様々なスタイルや思考法が、貪欲に導入された。アズベリー以来の実用主義の極まりがここにある。¹⁷ また、倫理的側面の高揚は、1876年版「Ritual」に、主の晩餐において「発酵していない純粋な葡萄ジュース」を用いることを推奨する記述を挿入させた。パストールの技術を用いて、歯科医であり初期メソジストの説教者でもあったウェルチによって、葡萄ジュースの製法が確立されたのである。¹⁸

一方、この時代、4年に一度の「ディシプリン」の改訂と共に、「Ritual」も頻繁に手が加えられていった。フロンティアに於ける実用主義の自由な拡大の陰で、メソジズムの持つ二律背反とも言うべきねじれの一方の側面が、「Ritual」の改訂を通して顕わになりつつあった。また、メソジスト監督教会が南北に分裂し、「Ritual」の改訂もまた、南北同時並行でなされる事態を招致した。Harmon は、この改訂の過程を次のように区分する。第一は「mid-century revision」の時代として、1864年のメソジスト監督教会の改訂を中心に、前後して1854年と1870年の南メソジスト監督教会の改訂がおかれる。第二の時代は、20世紀に入ってから、1910年の南メソジスト監督教会の改訂に始まり、1916年のメソジスト監督教会の改訂に至る。¹⁹ これらは、19世紀後半から20世紀前半にかけての米国に於ける「第1次リタージカル・ムーヴメント」を担う流れを生み出した。その嚆矢となったのは、ヴァンダビルド大学神学部長であり南メソジスト監督教会の出版部長であった Thomas. O. Summers による「Sunday Service」の復刊である。

Summers は、英国出身であったが、英国メソジストの影響を受けつつもそれとは異なる展開を米国のメソジズムにもたらすことになった。英国メソジストは、19世紀を通して、ウェスレーの「Sunday Service」あるいは英国教会の「祈祷書」を用いていた。ところが、英国教会内にカトリック・リヴァイヴァルが起こると、それに拒絶反応を

¹⁷ ホワイト、前掲書、297頁。

¹⁸ 前掲書、295頁。

¹⁹ Harmon, *op. cit.*, p.53.

示し、結果的に、ウェスレーの理念からも遠ざかってしまった。²⁰ しかしながら、米国においては、フロンティア時代の終焉とともに、中流意識の高揚が見られ、おりしもキャンプミーティングのテントから教会建築へと移行する時期にあつて、キャンプミーティングと信仰訓練を形にしたアクロン様式にならんで、英国ジョージ王朝風のゴシック・リヴァイバルが受容され、隆盛を極めると共に、さらには、英国教会に於けるカトリック・リヴァイバルの成果まで一部受容する流れが見られるようになった。²¹ その神学的な中身は、自由主義神学の隆盛ともあいまって、感情や自発性を重んじる礼拝に取って代わって、理性的に美しく豊かに礼拝を献げる群を形作ることを通して、社会的信頼と敬意とを獲得しつつ、社会正義とその改善に力を注ぐことであつた。回心への招きを強調するよりも、社会改革の唱道に説教の力点は置き換えられていくのである。²² こうして、美しく整えられた礼拝堂、訓練された聖歌隊、そして、その器に盛るのに十分なリタジーの回復が求められるべきであつた。しかし、回心者の聖餐から、信仰者の「しるし」として聖餐へと移りゆく聖餐理解の中で、「Sunday Service」に見られるような英国教会以来のウェスレーのリタジーの回復は、尚果たされずにいたのである。

ところが、第二次大戦後、第二ヴァティカン公会議へと至る四半世紀の間に、こうした自由主義的理念の持つ不十分さが明らかになってきたのである。この不十分さを補うべき根源的なリタジーの再構築へと向かう流れに先鞭をつけたのは、前述の、Harmon の著書である。²³ この主張に共鳴した「新ウェスレー主義」に立つ者たちは、ウェスレーの「Sunday Service」に示唆されながら、100年近く忘却されてきた一定の固定された礼拝形式を支持する立場をとり、聖礼典とその具体的執行の形としてのリタジーに於けるウェスレー的な側面の復興に向けて努力した。ことに、1946年に、メソジスト教会の聖職によって「聖ルカ修道会 (the Order of St. Luke)」が設立され、この目的のために尽力したことも特筆すべきことである。²⁴

その結果として、南北メソジスト教会合同後の1944年に、「Book of Worship (礼拝

²⁰ ホワイト、前掲書、295頁。

²¹ 前掲書、307頁。

²² 前掲書、307-309頁。

²³ 前掲書、309頁。

²⁴ 前掲書、310頁。

書)」が総会で承認され、さらに20年後、1965年に改訂版が出版されるのである。²⁵ 特筆すべきは、1965年版の「礼拝書」には、「新正統主義 (neo-orthodoxy)」の影響が色濃く反映されており、人間の造反と罪とに直面して神の恵みのみに信頼することが真理として受け止められたのである。その流れで、ウェスレーの「Sunday Service」の内容そのものは満足するものとしてあらためて受け入れられたのである。かつて、クランマーによって1552年版「祈祷書」に挿入されたことに由来する「罪の告白」が位置を回復し、悔い改めを重んじる敬虔が重んじられるようになった。ここに、「Ritual (礼文)」は「礼拝書」へと発展的に回帰し、「Sunday Service」の理念が部分的にはあるが復興したのである。

20世紀後半の「第二次リタージュカル・ムーヴメント」は、第二ヴァティカン公会議の決定的な影響の下にあると言って良いであろう。米国メソジスト教会は、この時、1965年版の「礼拝書」の出版を終えたばかりであった。1960年代、全ての礼拝の慣習と伝統が問われた時代にあつて、多くの実験的試みがなされた。パナーや風船の使用といったものから、Vestimentsの使用等、多くの試みがなされ、また多くの企てが過ぎ去っていったが、視覚的経験が礼拝に大きな位置を占めるという認識はゆっくりとではあるが確実に諸教会に定着した。しかし、時代の要請は、次なる改訂へと進むことを求めている。英国教会の「祈祷書」の流れとは全く別のところで、改訂の契機が訪れたのである。

1970年から開始された「礼拝書」改訂の業は、「現代英語をもちいること、古典的かつエキュメニカル、現代の神学反映、牧会上の柔軟性に配慮する」等の方針の下、1992年に完成した。²⁶ この改訂作業の過程に於いて明確になったことは、「礼拝式に関して何らかの選択が必要となる場合、通常その選択肢となったのは、クランマーによって媒介された中世後期の実践か、ヒッポリュトスによって記録された初代教会のrites (典礼) のいずれかであるということだった。ほとんど全てのケースに於いて中世後期のものよりも初代教会の方が優先された」。²⁷ ということは、「礼拝書」改訂の理念は、「新ウェスレー主義」のものではなく、よりエキュメニカルな初代教会へ

²⁵ 前掲書、310頁。

²⁶ *The United Methodist Book of Worship*, (Nashville: United Methodist Publishing House, 1992)

²⁷ 前掲書、313頁。

の回帰ということになり、それと引き替えに、メソジストの固有性が薄れることにつながったのである。

無論、ウェスレーが「Sunday Service」で目指した理念は、米国のメソジストを、初代教会に等しい、真実に聖書的、使徒的な教会として組織することであった。しかし、ウェスレーにとって、その理念を最もふさわしく体现する教会は英国教会であり、それを支える「祈祷書」にあったことは明らかである。そして、その「祈祷書」は、克蘭マーによって媒介された、中世後期のローマ典礼の遺産のみならず、宗教改革の諸成果、ならびに、ローマを媒介としない、セーラム典礼等の遺産、ガリア典礼の豊かさ、加えて、東方諸教会の典礼に至るまで、広くキリスト教会全体をカバーするリタジーの豊かさを受け継いでいるものである。このことは、聖餐理解にも大きく関わる点であることを指摘したい。

2. 米国メソジスト教会における「Ritual」の変遷におけるトピック

ルーツである英国教会の「祈祷書」以来の課題として、ピューリタニズムとカトリシズムの拮抗があることは明らかである。米国メソジスト教会もまたこの課題を受け継いでいるのである。先述した、メソジズムの特質としての二律背反の要素がねじれつつも共存するということは、その後の「Ritual」の変遷においても影響を及ぼしている。ここでは、聖餐に関わるリタジーにしばってその変遷を、Harmon の導きによって検証したい。

1848年のメソジスト監督教会ならびに1922年の南メソジスト監督教会の「ディシプリン」改訂委員らは、長年のメソジストの伝統を破って、聖餐式文を「Ritual」の冒頭から、他の諸式のひとつとして巻末に移してしまった。²⁸これが、意味するところ、メソジズムの中にある、二律背反の要素のねじれ現象であろうことは想像に難くない。やがて、米国メソジスト監督教会は、このねじれの克服へと歩み出すのに40年以上を費やしているし、逆に、聖餐式文を巻頭に保持してきた南メソジスト監督教会は1922年になってねじれ現象に襲われているのである。

大方受け入れられている見解として、ローマ・カトリック教会のミサに関する教義

²⁸ Harmon, *op. cit.*, p.78.

は、キブリアヌスの時代から発展したものだといわれている。彼は、ユーカリストにおける犠牲的性格を、食事としての性格に「対抗するもの」としてよりもむしろ「加えるもの」として提示したのであるが、後に、この犠牲的性格が司祭の行動を規定し、信徒の一種陪餐のみという限定、私唱ミサ、死者ミサといった展開を見せてくる。そして、犠牲の反復を来たせるといふ福音主義者には受け入れがたい力を司祭が持つことになった。これこそが、宗教改革に於ける主要な争点となった。聖餐が執行されるのは食卓 (Table) なのか祭壇 (Altar) なのか、真臨在 (Real Presence) なのか、象徴 (representation) なのか。ローマ・カトリックの神学者は「これはわたしの体である (hoc est meum corpus)」を、福音主義者は「わたしの記念としてこのように行いなさい」との言葉を強調する。

メソジスト教会は、直接この論争に関わることがないとはいえ、1661年の英国教会の「祈祷書」に源を持つ「Ritual」は、それゆえに、ローマ的な要素を根絶したものである。化体説、共在説、ツヴィングリ主義的象徴説のいずれにも与せずして、宗教簡条の18条「キリストの体は、霊的かつ天的な仕方を求めることにおいてのみ、晩餐において与えられ、取られ、食される。正しく謹みて信仰を以て此聖なる礼典を受くるものは使徒の云へるが如く其パンを食してキリストの体を共に享け其葡萄酒を飲みて享くるなり」。²⁹

ウェスレーの聖餐理解は、そのキリスト論と深い関わりを持つ。それは、永遠の犠牲の大祭司キリストを中心とするところに特色がある。ウェスレーにとって聖餐式の主体は、大祭司キリストである。その神学思想の本質は神秘的な sacramental なところにある。ウェスレーは、大祭司キリスト論をブレヴィント博士からの引用である「キリスト教の聖礼典と犠牲」から説明している。³⁰ さらに、G. Dix によれば、ウェスレーによるメソジスト運動が、聖餐式復興運動であったことを指摘した上で、³¹ 英国教会の聖餐理解を「犠牲理解」を軸に説明している。³² この聖餐理解は、ウェス

²⁹ Ibid., p.79.

³⁰ 野村 誠「英国聖公会の聖礼典からウェスレーを解釈する」『ウェスレー・メソジスト研究』7 (教文館、2006)、14頁。

³¹ 前掲書、13頁。

³² 前掲書、14頁。

「聖餐式は、三位一体なる神の内部における交わりの行為であり、天上の祭壇で

レーのそれと響き合うのである。

メソジスト教会の「Ritual」の変遷を通して見えてくるものは、このウェスレーの犠牲理解を中心とした聖餐理解をどのように受け止め、あるいは排除してきたのかと言うことである。メソジスト教会の聖餐理解は、その「犠牲理解」との関わりで論じられるべきである。それを、「聖別祈禱」と「制定語」の相関関係から考察したい。³³

合同メソジスト教会の聖餐に関する見解は、次のように状況を説明している。「19世紀後半から、米国メソジストは年に四回の聖餐執行に堅くとどまり続けていた。聖餐は、聖なる儀式張ったイベント程度にしか考えられていなかった。礼文の調子は、深い悔悟の念に満ち、神の恵みの祝宴という側面を著しく弱めていた。ウェスレーンのユーカリストに関する豊かな理解は19世紀から20世紀にかけて大きく損なわれ、聖餐は、単なるキリストの死の記念になってしまっていた。」³⁴

確かに、聖餐そのものの意義が失われていたということは否めないが、「犠牲理解」という観点から見ると、あながち失われた世紀として片づける訳にもいかないのではないだろうか。むしろ、指摘すべきは、20世紀後半にいたって、メソジスト教会のたどった道として、「犠牲理解」の衰退が見て取れる点ではないだろうか。

1992年の「礼拝書」において、大筋で1661年の「祈禱書」以来手がつけられてこなかった、聖餐式文が全面的に改められた。旧来の式文も「第四研式」として収められてはいるが、あくまでも主たる式文は改められているのである。これは、第二ヴァティカン公会議と前後して、ローマ・カトリックから広く福音主義諸教会を横断する

第一位格の父なる神に、第二位格の子なるキリストが、永遠の大祭司として御自身を犠牲の供え物として献げ、第三位格の聖霊が交わりとして働く。物素のパンと葡萄酒は聖別の祈りによって（制定語ではなく：筆者注）聖別の祈りによってキリストの肉と血に変えられる。地上の教会はこの交わりを通してキリストの聖なる体となる。聖餐式に参加する信徒はキリストの体の肢体として信仰の生命が強められ、三位一体の神の交わりに招かれる。キリスト教の生命は聖餐式を中心にして成り立っているのである。」

³³ Harmon, *op. cit.*, pp86-155. 参考までに Harmon の作成した対観表に、筆者が増補したものを論文末尾に掲げる。

³⁴ Gayle. C. Felton, *This Holy Mystery; A United Methodist Understanding of Holy Communion*, (Nashville: Discipleship Resources, 2004), p.13.

かたちで大きなうねりとなった典礼改革の流れに属する改訂である。特筆すべきは、「制定語」と「聖別祈祷」の位置関係である。英国教会の「祈祷書」以来の流れに依れば、聖別祈祷の後、聖別された物素をもって、制定語を読み上げる順序であった。それが、アナムネーシスの回復と共に、制定語が、エピクレーシスを伴う聖別祈祷に先行して置かれるようになったのである。これは、あきらかに、「礼拝書」改訂に於いて、クランマー譲りの中世の束縛から離れ、ヒッポリュトスの使徒伝承³⁵にならう仕方を選択したためと推測できる。しかし、初代教会のリタジーに回帰するという理念は、図らずもメソジストの教理的特質としての「犠牲理解」の衰退を生み出しているのではないだろうか。Agnus Deiが1965年の「礼拝書」で挿入されたにもかかわらず、1992年版ではオミットされていることは、この事態を端的に現している。先にふれたとおり、1965年版では、「新ウェスレー主義」の主張が実を結んで、ウェスレーの「Sunday Service」の理念が一部回復されたのであるが、それが後退したのではないかとの懸念がある。

合同メソジスト教会は、その聖餐理解の中心を「リアルプレゼンス」に置くと主張する。³⁶ それは、確かな主張であるが、併せて「犠牲理解」の主張が伴わなければ、何のための「リアルプレゼンス」かが分かりにくくなる。真臨在は、人に悔い改めを促し、真実に罪を悔い、嘆く憐れな魂に、神の恵みが豊かに注がれるのである。「犠牲理解」の衰退は、悔い改めへの招きを臆にし、安易な恵みを生みやすくし、「恵みの座」の衰退、無力化、廃止を伴い、ウェスレー固有のヘリテージが、聖なる公同の教会全体に貢献する特質を著しく衰退させているのではないだろうか。真実に「リアルプレゼンス」を回復するための道が求められている。

その意味では、フロンティアの時代を、失われた世紀として放棄するのではなくして、「恵みの座」で真臨在に与り、真実の悔い改めへと導かれる体験を再評価できるのではないだろうか。確かに、リタジーの面から言えば、暗黒の世紀であったことは否めない。しかし、聖餐は、ユーカリスト（感謝の祭儀）であるとともに、ミサ（犠牲の祭儀）で無ければならない。どちらが欠けても真実な「リアルプレゼンス」に与ることは出来ない。メソジスト・ヘリテージの抱える二律背反的特質は、どちらか一

³⁵ 土屋吉正訳『聖ヒッポリュトスの使徒伝承』（オリエンズ宗教研究所、1983）、14-16頁。

³⁶ Felton, *op. cit.*, p.24.

方が主導権を握るのではなくして、むしろ、永遠の犠牲の大祭司キリストに結ばれて、感謝と犠牲が恵みによって一致する根源的な「包括性 (inclusive)」の獲得に務める可能性を追求することに意義があるのではないだろうか。

3. 日本メソヂスト教会における「礼文」の変遷におけるトピック

1907年、日本メソヂスト教会が、三派合同を果たして最初に出版した「礼文 (Ritual)」は、米国メソヂスト監督教会のものを下敷きに、南メソヂスト監督教会、カナダ・メソヂスト教会のそれぞれの「Ritual」を参照して作られていることは明らかである。少ない聖餐執行 (年4回) は、当時の母教会と同様の習慣である。さらに、Altar Rail は、教派的シンボルの域を出ることはなく、その意義が称揚されることも少なかったといえよう。

メソヂスト教会の聖餐理解は、その「犠牲理解」との関わりで論じられるべきであることは、日本メソヂスト教会においても妥当する。米国のそれと同じように、「聖別祈祷」と「制定語」の相関関係から考察したい。

1907年、合同後最初の「礼文」においては、当時の母教会のそれと同じく、聖別祈祷の後に制定語が位置していた。しかし、日本メソヂスト教会に於ける最後の「礼文」改訂となった1938年版においては、その順序が逆転するのである。これは時期的には、母教会の「Ritual」改訂の動きとは連動しない。ただ、可能性として、1925年のカナダ合同教会創立が影響している可能性もある。³⁷ また、もう一つの可能性として、当時、日本に於いて福音主義諸教会の中で最大の教派であった、日本基督教会の「式文」の影響を考えることも可能である。どちらかと言えば、ツヴィングリズムの象徴説が基調となった聖餐理解が日本の福音主義諸教会では主流であったことは否めない。母教会に先行する形での「犠牲理解」の後退が著しかったのではないかと推察できる。それも、初代教会への回帰という「リタージカル・ムーヴメント」とは全く離れた文脈で、ツヴィングリズムへの傾斜が見られるのではないだろうか。日本メソヂスト教会は、「第一次リタージカル・ムーヴメント」の成果を殆ど受け入れること

³⁷ カナダ合同教会の「*Book of Common Order*」(第二版、1950)では、二種類の聖餐式文のいずれもが、制定語を先とする結果となっている。

なく、教会合同と戦争へと向かい、リタジーと聖礼典復興の機会を失ったのである。

戦後、日本基督教団は、教憲・教規と共に、信仰告白に先立って、1948年「式文」を制定した。取められた聖餐式文には、当然のことながら「犠牲理解」は全く受け継がれず、加えて、英国教会由来の豊かな祈祷群も引き継がれることなく、メソジズムの特質は、少なくとも「式文 (Ritual)」上では失われたまま、現在に至るのである。

結—「犠牲理解」保持の意義と「礼拝書」の回復—

メソジズムの聖餐理解の固有性は、英国教会の「祈祷書」を通じて受け継いだピューリタニズムの基調の中に、ウェスレーによって「犠牲理解」の回復と執行の頻度の回復がなされた点にある。

しかしながら、これが十分に継承されたとは言い難い現実があることが、「Ritual」の変遷を通して明らかになった。また、北米に於ける19世紀フロンティア時代の独自の発展と変質をどのように評価するかが課題であった。これについては、従来、リタジーを重んじる立場からは否定的評価のみがなされてきたが、「犠牲理解」の回復という視点から、見過ごせない位置を持つことが確認された。また、20世紀後半に至り、上記の諸課題を克服するための取り組みが断続的になされてきたが、それによって生じた更なる課題も、本文で指摘したとおりである。

更に加えて、近年全世界的に顕在化しつつある「陪餐資格」問題である。これはむしろ、洗礼理解と称すべき課題である。Harmonが、その道を切り開いたように、いずれの諸課題も、「礼拝書」の回復によって乗り越える契機を与えられるべき事柄である。今後ますます「包括的 (インクルーシブ)」であることと、「犠牲理解」の回復との相克が課題となるであろう。

(日本基督教団西新井教会 主任牧師)